



東九州支部報



平成17年度定例総会(4月16日(土))(八丁原ビューホテルにて)

《 もくじ 》	
定例総会と平治岳	1
水分峠からカルト山へ	3
木場の峠から鹿倉の峠へ	4
フンザの旅(1)	5
対馬一三山	5
グリーンワルト・トレッキング②	7
私の無名山ガイドブック	21
今西錦司②	9
お知らせ	10
後記	10
附録	11

定例総会を筋湯温泉で 四月月例山行は平治岳へ

報告 加藤英彦

平成一七年度の定期総会総会と四月の月例山行が四月一日、一七日の二日間の日程で行われた。

一六日(土)、午後六時より九重町筋湯温泉の「八丁原ビューホテル」にて、一泊・懇親会を兼ねた総会を行った。出席者三〇名と別に委任状七三名で総会成立。西事務局長の進行で開会。議長に野村芳雄会員を選出。まずはじめに梅木支部長より「今年是我が日本山岳会の創設百周年の記念の年で、中央分水嶺踏査をはじめとした各種の事業・行事が予定されており、一〇月には記念の大会も開催されるなど意義ある年となっている。支部としても記念の登山大会など計画しており、会員の皆さんの協力でこの意義ある年を盛り上げて欲しい」と言う旨の挨拶があった。

続いて、配布された総会資料にもとづいて議事進行で、平成一六年度の事業報告、会計決算報告、監査報告があり、一括承認された。このあと平成一七年度の事業計画案、予算案の提案説明があり、質問等意見交換が行われ、提案通り決定された。この中では、今年度の月例山行のテーマを「四季折々の花」とすることや、「百周年記念登山大会」「青少年体験登山大会」「分水嶺踏査完了記念登山大会」の三つの登山大会を兼ねて七月二四日に実施することなどが決められた。

最後に、今年度は役員改選の年であるが、現支部長の梅

木秀徳会員が留任と言うことで満場一致承認され、副支部長以下他の役員については規約により、後日支部長が任命することとなった。

総会終了後は恒例の記念講演で、今回は「ヒマラヤの旅」と題して三月にカラコルムのフンザ地方を旅した梅木支部長の報告があった。長年抱いていた夢、未知の地「カラコルム」を訪れ、ヒマラヤ、カラコルム、ヒンズクシーの三つの山脈を見渡せるところに行ってみようというのが実現したという話、アンズの花咲く桃源郷、美しいフンザの地を訪れた感激など、うれしい旅の報告であった。

総会の後は懇親会で、まず最長老で遠方からきた宇目町の茅野会員の乾杯の音頭が始まり、後は皆さんの懇親の場となり、午後九時に一旦、佐藤副支部長の「一本締め」で中締めとなったが、話ははずみ一〇時近くまでにぎやかな懇親会は続いた。一七日(日)、午前七時三〇分に朝食。食卓に出た藪の薑とつくしが美味しかった。旬のものはその時に食べてこそ本当に美味いものだ。さすがにビュールホテルさんといったところだついでに、昨夜の芹ご飯も美味しかった。

平治岳へ

(中央分水嶺)

四月の月例山行の分水嶺歩きは大窓から大戸越までだ。八時にホテルを発ち、それぞれの車に分乗して本日の山行の出発地点の吉部に集合。大船林道ゲート前の登山口に集合したのは合計二十二名である。

林道の鳴子川に架かる橋を渡り、ゲートのすぐ先を右へ入り鳴子川の右岸を登るルートをとる。実はこのルートは支部報第二十七号で「私の無名山ガイドブック⑩」の「平治北尾根へ」と題して飯田さんが紹介している、まさにそのルートなのである。

はじめは鳴子川の渓谷添いに自然林に囲まれた中のルートを行き、やがて沢から離れた斜面の古い道を登り、一時間ほどで大船林道に出る。林道に出て二〇〇mほど行ったところから左の林に入る小道があり、何も標識はないが赤いテープがある。ここで林道を直進し、坊ヶつるを散策するという五名と別れて、一七名が平治岳に向かって左の林に入る。右手に本日の目的の平治岳が見えるが、道は平治岳から遠ざかるかたちで左へとゆるやかに自然林のなかの落ち葉のクッションのきいた歩きやすい道を登って行く。登り詰めて広い稜線(一一四

〇m)に出るといきなり前方が開けて、飯田高原、千町無田の見はらし台となる。そのまま稜線を進むとスギの造林地へと入る。「スギ精英樹・植付55・4」と表示のある看板を左に見て進み、アセビの群落のある溝状になったところを通る。アセビの花が満開で、その花弁の赤色と染まってややピンク色に見えるアセビがきれいだ。

右上の稜線がヨシガ池から上ってきた大分水嶺で、その山腹を巻くようにして下っていくと大窓の鞍部に着く。ここからが分水嶺歩きで、そして本格的登りとなる。しばらく登るとややさかりをすぎたマンサクの花があちこちに見えてきて、アルミの梯子を登り、古い木の梯子を登り、ロープを張った急斜面を登ると左に大窓と称する岩がある。その頂きに登ってみると眼下に大パノラマが広がって見えた。

やや緩くなった斜面の、低いノリウツギの間を右に左に迂回しながら登っていくと広い平らな台状の明るいカヤ野についた。我々の前を登っていたパーティーはここでもう車座になって一杯やり始めた。それほど気分の良いカヤ野で、前方には平治岳が間近に高く三角錐に聳えている。この台地の名前を聞くが誰も知らない。それぞれ勝手に女性会員の名前や自分の奥さんの名前をつけて「△△平」などと言っ

ているが、さしずめ「平治平」とでも呼ばばよさそうな雰囲気のところである。ここで小休止・・・。

目の前に見える平治岳の山頂への最後の登りとなる。小さな谷状の中のノリウツギの低木の中を急登が続く。足もとにはバケイソウの小さな新芽があざやかだ。そしてやつと気づくほど小さな、「岳梅」(クサボケ)の花のつぼみが息づいている。やがてイワカガミの葉が見受けられるようになるともう山頂に近い。傾斜も緩くなり、ノリウツギのトンネルを行くとあつけなく、とび出るようにミヤマキリシマで囲まれた山頂に到着。



(平治岳にて)

山頂で全員そろって記念撮影のあと、西峰との鞍部に下り、ミヤマキリシマの群落の中の草

地で昼食をとる。好天に恵まれてはおるが、さすがにこの時期の平治岳には登山者が少ない。山頂に二人いただけであとは見受けられない。しばしの昼食休憩の後、大戸越へと下る。西峰の岩の上でやつと電波が通じ、坊ヶつる散策の五人組と連絡をとると、もう暮雨ノ滝付近を下山中とのことである。下山路を下るが、毎年の登山者の数の多さで、この道は荒れる一方の状態だ。かなりえぐられた状態が激しくなっており、路面も小石が常に落ちていくような様子である。根本的な登山路の対策が待たれるところか・・・。

大戸越から坊ヶつるへ向かって下るが、この道も年々踏み荒らされていくばかりだ。途中から大船林道への近道コースへの分岐に入る。この分かれ道の名前を聞くが誰も知らず、名前がないようだ。ここでも勝手にそれぞれ名前を言っているが「林道分かれ」という呼び名はどうだろうか。それと、この分岐点にははつきりとした標識が欲しいところだ。

あとは平治岳の山麓を西に巻くようにして進み、大船林道の駐車場へ出る(一四時一〇分)。林道を下り、今朝登ってきた林道近道の鳴子川右岸ルートに入ると、ここから暮雨ノ滝に行ってみようという三名が沢に向かつて下りていった。残りはその

まま往路を戻っていき、出発地点のゲートに下り着いて本日の山行は終了となった。好天に恵まれて、早春の快適な山歩きの一日であった。

◎コースタイム

八〇〇ビュホテル発(車)、八二五大船林道ゲート発、九二〇小休止(林道出口の手前)、九三〇大船林道、九五〇小休止(一四〇m、千町無田展望地点)、一〇二〇大窓鞍部、一〇三五大窓、一〇四五小休止(平治平)、一一三五平治岳山頂着、一一五〇(一二三〇)昼食休憩、一二五〇小休止(大戸越)、一三二〇大船林道への分岐、一四〇五大船林道終点駐車場、一四二〇林道近道入り口、一五〇五大船林道ゲート着

参加者：阿南、安藤、飯田、伊賀、今山、石川、加藤、茅野、小竹、後藤、佐藤(秀)、佐藤(正)、佐藤(善)、園田、徳丸、長友、中野、長野、西、野村、牧野、渡部



水分峠から カルト山へ

(二月月例山行報告)

中野 稔

雨の祝福の中、大分を定刻の六時に出発、七時半に待ち合わせの水分峠に向う。

二台の車は大分駅高架工事に伴い、後数年で無くなる大道陸橋を渡る。医大を越えて向之原に出た頃には雨は雪に変わり、鬼ヶ瀬辺りから雪景色を楽しめる様に成りだしたものの、庄内の役場辺りからはタイヤがチェーンを欲しがり出した。

この時に庄内駅入口の交差点近くに何故かいる、ピンクハウスの主人の顔を一度拝見したいと思うのは不謹慎だろうか？

タイヤのリクエストにお応えして、悪戦苦闘しながらも何とかチェーンを着けたものの、二百メートルぐらいでやり直す羽目になったのは一寸辛かった。

案の定、後の二台もかなり椅子摺ったらしく、水分峠到着は予定よりも二時間も遅れて、九時過ぎた頃でした。

青少年スポーツセンターの坂道で、悠然と我々の車を横目で見過ごしていたトラック数台と乗用車が立ち往生していた。ガードレールに車の後部バンパ

ーをぶつけて止まっている車をシツカリ脛に焼き付けてしまった。(飯田車はさらに一〇分遅れて到着。七時半に着いていた野村君は、誰も来ないと思っ

て引き返したとのこと) 駐車場の積雪は十五センチぐらいで、小雪の降りしきるなか雪山の装備を開始

。雪山にはストックと手袋二枚、防寒帽とスパッツ、靴下は二枚ぐらゐが望ましい。服も防寒用にセーターぐらゐは余分に持って行くべきだろう。

九時半には国道二一〇号線の峠の一番高いところの少し先から取り付く。二、三メートルの植林の杉に積もる雪は、まるでクリスマスツリーを連想させてくれる。

雪山の藪漕ぎは生涯最初で最後かもしれない。日出生台演習場の自衛隊員との分水嶺登山同様、求め続けなければ決して得られないささやかな感動である。雪とガスの中、視界は百メートルぐらい。幾度も方向を確認し、引き返したりしながら標高八一〇メートルの林道の三叉路に出る。帰りはこの又路から積雪二十センチのラッセルで、二十

十分で駐車場に着く事になる。次は標高八百九十メートルの林道を横切り、九百六十三メートルのポイントを目指す。三叉路からは急坂が続く。藪漕ぎよりも膝近く迄ある雪

のラッセルが大変で、先頭の人のご苦労様でした。途中猪の足跡が山頂に向かって続いていたのだが、果たして何の為に何を求め

て行ったのか、我われと目的は違う事ははっきりしている。十一時四十分頃九六三メートルに着いたので、ここで昼食と相成る。一面の雪景色の中で、展望はないもの、お湯割と、熱いお茶をすすりながら雪国や本州の雪山を連想していた。何か問題に、不思議な事にひとり



(九六三m地点で)

カルト山の東南東五百メートル地点の、標高一二二〇m迄行く予定だったが、メンバーの体調と連帯感を優先し、泣く泣く足を南に向けた。十二時二十分頃に下山を開始

して、一時十分には駐車場に到着。帰りは此処でチェーンを外し、百円ショップではないが、百円で入れる由布院の乙丸温泉館に寄る。夏の頃は何となく物足りなかつた温度であったが、今回は納得のゆく温度であった。融けかけた雪が路肩に残る湯布院の町並みを歩く人々は、殆どが県外者であろう。地方経済の活性化には公共投資よりも、民間の知恵をいかに利用するかに係っている。知恵やアイデアは尽きる事がない無尽蔵だ。江戸時代の遊びや楽しみを、中国やインドの古代の遊びを体験させたり、当時のファッションや食事も温故知新として観光地の活性化に応用できる気がする。

これから先人間が求めるものは、文明と自然との調和であり科学と宗教の和音だ

と思う。

参加者：西、安部、飯田、石川、徳丸、中野



小場の峠から 鹿倉の峠へ

(二月月例山行報告)

安部 可人

地図を観てもルートはつかめず、練習不足だし、今回は乗り気でなかった。西、清水、長野の三女史と私、この四人は今回の区域の担当だったと思い出した。地図「豊後森」を見て下さい。中野さんのおかげで正確な報告が出来ます。

午前六時半に珍珠の牛の像の広場で待ち合わせて、今日のメンバー八人がそろって車四台で鹿倉へ。トンネルの南側入口に車二台を置き、あとの二台に分乗して引き返し、国道三八七号線を片草から小場へ。明け方降ったのか、雪が薄っすらと路面を白くして、凍りついた小場の峠に車を駐車。しかしさほどは寒くない。

七時二三分に出発。峠から稜線へのとりつきは、いきなりヤブこぎの急登、林床は二、三センチほどの雪である。五キロほどの行程ながら、ヤブこぎとなれば終点まで行けるかどうか分からないと飯田さん。久しぶりの腰痛！困ったなア。ヤブではエスケープも難しい。濃いヤブと、向こうの稜線は

霧に隠れ見えず、ルートファインディングが難しい。小場の北側の二つめのピークから左に下りすぎて、分水嶺からはずれたのに気づき引き返す。岩の露出した急斜面のやせ尾根を下るとヒノキの林となり、さらに下ると片草から深耶馬溪に通じる県道の内松の峠のカーブに下り着いた。八時一六分で、途中迷って二〇分のロスタイム。

峠から北にまっすぐに稜線に取りつき、クヌギの林を軽く登る。五六九mピークを八時三九分に通過。ここでまた少し西のピークまで進んで間違いに気づき引き返す。約一〇分のロスタイム。

地図上の556mピークの少し西側を通過し、国道三八七号線の鉄橋を右手に見ながら平行に進むと、やがて大きく北へ曲がり、大きくいったん下りながらさらに西へとカーブしていく。分水嶺をそれないようにコの字形に遠回りしていくからひどく時間を食う。遠くに見える高い一本の赤松を目印に藪をかき分けていくと、やがて広い稜線のピーク、五六〇mに九時二九分に着く。霧が晴れてきて、南側に稜線が重なって見えているが、向こうの稜線が最初に迷ったところで、それほど遠くないのにここまで一時間半近くかかったことになる。「まだ五分の一ほどしか進んでいない」とや

やあせり気味の飯田さん。

ここで休憩の後、再び西へ向かう。少し展望の開けたところを通ると、前方下方に田んぼと一軒家が見えてホッとする。左手後方には黒岳も見えてくる。地図を見ると一軒家の北、三〇〇mの印がある地点の北、三〇〇mほどの稜線あたりにいるようだ。



(黒岳)

おしゃべりで元気の良い女性三人。中には清水さん、膝にゼリーを注射してやっと登れるようになったと、久しぶりの参加。カマやナタを使う園田、石川の両氏。読図(二万五千と五十分の一の森林基本図)とGPSでルート確認する飯田、中野両氏。彼らとなら安心してついていける。あとは、安部さんが元気なら文句なし・・・。

地図上に、内松から錦雲峽へ通じる点線上(実際には道はない)のピーク(五五六、八m

(森林基本図)で昼食をとる。



(五五六、八mピークにて)

時刻は十一時二分。長野さんからしつぷ薬、飯田さんからカン酒をいただき元気です。再び陽がさしてきて、雪もやんで、気も晴れる。

再出発するとすぐに、突然ブッシュが切れて目の前の展望が大きく開ける。稜線(分水嶺)の南側が、クヌギの点在する放牧地となって、ずっと続いている。南に牟田の台が堂々と・・・。稜線に残る古い有刺鉄線に沿って、牛の道を楽々と進む。初めてペースがあがる。緩いアップダウンがいくつも続く。地図上の五五四m(通らず)の北、五つめのコブに着く。一二時四分。ここが最後のエスケープ可能地点だ。すぐ下のコルから小さな道が南に向かって下りている。これを行けば約一キロで県道に

出て、さらに一、五キロ行けば片草に出れるはずだ。しかし牧野の稜線歩きでペースも上がり、時刻も早いので、同じアルパイトなら目的地まで行こうと全員決断。

いくつものコブを越す。快調にとぼしすぎてつい油断。行く手をふさぐブッシュに踏み込むが前に稜線はない。下は崖。地図を確かめると、手前のコブで北西の稜線へとブッシュを分けるべきところを、放牧地に沿って南西に進んでしまったのだ。引き返して軌道修正。ヤブこぎの再開だ。樹林の中のうす暗い支尾根に入り、再び読図とGPSのフル操業。北西から西に、さらに北西へ、北へ、西へ、北西へと、小さなコブを通過ごとに向きを変えて、スギの植林地や低木のブッシュを分けて進む。

二時を過ぎると疲れが出て、腰は限界に近い。しかし有り難いことにヤブはB―二級。チョコ山が左に見えてきたので終わりには近いと思う。スギの風倒木の斜面を下ると、スギ林の中の薄暗い広い鞍部についた。二時四五分。ここは鹿倉トンネルの真上だ。

目の前の露岩の急斜面は今日の最後の登りで、それを通過して一〇分で林道に出た。遠くには執念深く、牟田の台がまた姿を見せていた。林道を下り、三時一〇分、鹿倉トンネルの南に到着。これで本日の予定全部終

了。置いてある二台の車で小場の峠へ引き返し、現地解散。

参加者：安部、飯田、石川、園田、清水、中野、長野、西

フンザの旅

(その1)

梅木秀徳

アンズの花の咲くころを狙ってカラコルムのフンザ地方を訪れた。

「歴史と自然を学ぶ会」がパキスタンのガンダーラ遺跡見学を企画したのに便乗したもので、イスラマバードからベシヤム、チラスとカラコルム・ハイウェイを北上、ギルギットからフンザに入り、カリマバードに連泊上フンザのグルミット村、パース村を訪れ、パトウーラ氷河末端の標高二、六〇〇m付近までたどった。もちろんクンジンジュラ峠は積雪で、今年は開通がかなり遅れそうだとの情報だった。

お目当てのアンズの花は、ギルギットでは散り始めていたが、かつてのナガル王国からフンザ王国に入ると満開で、村の娘さんらを花の下に呼び寄せ、カメラに収めてきた。



(アンズの花とフンザの子供たち)

という感じがある。だが本当のお目当ては、その花の上にそそり立つ氷雪の山々にあった。ところが、三月というのにガイドもびっくりするほどの悪天候で、山頂まで仰ぎ見るといいうわけにはいかなかったのが残念だった。本来なら、チラスあたりでナンガ・パルバット、さらにグルミット・ガナールではラカボシ、フンザではウルタルはじめパトウーラ山群を堪能できるはずだった。それでも、いくらかの写真は撮れたので、興味のある方にはご披露の機会もあるう。

この冬は降雪が多かったそうで、その雪解け水に加え、豪雨というほどではないものの、連日の雨で、ハイウエーの旅は苦難の連続だった。大型バスを借り切ったのだが、第一、ハイウエーそのものがその名に値するかどうかである。日本で言えば大型林道みたいなもので、全線は全くなく、山腹を忠実に巻いて走る。橋もなく、谷を渡る場合がなければいたるところで水の中を走行する羽目になる。トラックやバスは車高があるから、余程の水でなければ通れるが、小型は大型に無理やりに引っ張ってもらい場面もしばしば。

加えて、落石が多いというより、谷間ではいたるところで岩石流が起こり、山腹では崩壊である。路肩はしっかり造ってあるが、道幅がおかげで半分以下となり、これには小型車は対応できても大型車はお手上げ。現場には長蛇の車列が生じ、ドライバーや乗客が素手で岩石の除去に当たる。さらに難物は雪崩である。デブリが道を覆ってしまふと、ブルドーザーでも排除に数日を要する。

私たちもこうした谷間の増水、岩石の崩壊に悩まされ、最後は舗装はされているものの、悪く言えば「国際山道」である。山道をサンドウと読めば棧道にも通じるだろう。中国と共同で人海戦術によって建設したものであり、トンネル部分

雪崩で止めを刺された。酷いときには衛星電話でジープを呼び寄せ、迂回路を探して通った。今思えば、フンザに入れたことさえ幸福で、災害をすり抜けて通った感じである。その証拠に私たちの後のグループはほとんどがフンザに入れなかったというし、悲運の組は落石により車を破壊され、人的被害も発生したそう。

とで、強引に行くことに決めた。昨年と同様にレンタカーを借りて山登りを楽しもうと思っていたが、運悪く二、三日前から風邪をひき高熱で旅行すら行けない状態だった。

そうまでして、何でフンザに入ったのか。単に山と杏の花を見たかっただけなのか。それについては次回に書こう。(次号に続く)

対馬十三山

児玉章良
佐藤壮悟



平成一三年に「宍岐」に職員旅行に行ったときに、一日だけ別行動でレンタカーを借りて「男岳、女岳、岳の辻(二等)」に登った。翌年、職員旅行の幹事になったので、昨年は「宍岐」に行ったので今年是非「対馬」まで行きたいというこ

次の日、九日は雨模様だった。昼頃何とかチケットがとれたとの連絡があった。早々、大分支店に受け取りに行き、そのあと安心院の「ワイン祭」に行った。ヌーヴォ・ワインを買い込み、院内の「奥山(四等)」に登った。

一〇日、曇り、朝六時に豊肥線に乗り込み、六時四五分初ソニック四号で博多まで行った。福岡は雨が降っていた。タクシ―で博多港(一〇〇〇円前後)まで行き、一〇時四五発のジェットホイール「ヴィーナス号」の出航を待った。いやな予感がしていたが、海上が大しけということであ航になった。慌てふためいていたが、一〇時発のフェリーが出るとのこと。一〇時一〇分、なんとか駆け込み乗船したが、二等客室は座れないほど一杯であった。飛行機も欠航したそう。

仕方なく指定を取り、横になるほどの部屋に移ったが、外海に出ると激しく揺れ始め、とても寝る状態ではなかった。まさに転げ回るのである。地獄の旅であった。本来なら「老岐」まで二時間、さらに「対馬」まで二時間。しかし、かなり遅れて「対馬」の「厳原港」に着いた。

奇跡だが天気がウソのように回復した。台風一過なのであろう。早々に予約しておいたレンタカーに乗り込み「矢立山」を目指した。車で二〇分くらいである。登山口がわからず探している。大島毛山(555m)「登山口があった。とりあえず登ってみた。踏み後はほとんどない。四等三角点がある。目の前には「矢立山」が。往復三〇分くらいである。再び登山

口を探した。やっと草に隠れた登山口を発見。やや暗くなったが登った。往復四〇分くらいである。三等三角点がある。展望は北側のみである。登山道はエビネ蘭がいっぱいあった。今日は「対馬グランドホテル」泊である。以前泊まった時にいたきれいなフロント係はいなかった。この日は三〇〇〇円プラスして「石焼き料理」を食べた。

一旦「厳原」まで戻り、遅い昼食を食べ、昨日登った「大島毛山」の近くの「舞石ノ壇山」に登った。ガイドブックには五分で登れ、山頂は草原の山と書いていたが、とんでもない。ルートはなく、すごい藪こぎで山頂も雑木に覆われていた。山頂には三角点はなく、「日韓トンネル測量」の三角点のようなものがあつた。

降りた頃には五時になってしたが、「権現山」に向かった。この山は電波塔が立ち並びどこからでもはっきり分かる山である。車で山頂にたてる。二等三角点の標柱があつたが、石は三等と刻まれていた。不思議である。

さらに林道を車で進むと同じく電波塔の立つ「隠蔵寺山(四等)」に着く。帰りに途中の「上坂展望台(山)」に立ち寄る。以前ここから「白岳」を見て、登りたいと思つたが、今回はすでに暗くなつて見えなかつた。

ホテルに戻つて夕食をとつたが、今回はお決まりのコースであつた。十分な夕食である。外は漁り火が美しい。明日の一三時一〇分のジェットホイールで帰る予定だったが、あまりに天気がいいのもう一泊することにした。

一二日、今日はゆっくり朝食をいただき、九時頃出発。快晴。佐藤先生が初めての「対馬」な

ので、対馬藩主の菩提寺「万松院」に行った。はっきり言つてここ以外に見るところがないと思ふ。次にすぐ隣の「八幡宮神社」に行った。ここが今から登る「有明山」の登山口となる。駐車料金四〇〇円を払つて登山開始。

途中「清水山」(四等)を経由して登るようになっていたが、ここに登らずに近道で行つた方がよい。「清水山」は城跡で「一の丸」までルートがはっきりしており展望もよいが「二の丸」「三の丸」は草ぼうぼうでルートもはっきりしないので。二時間くらいで山頂に着く。一等三角点があり、三六〇度のパノラマで、昨日まで登つた山がすべて見える。特に「矢立山」と「厳原港」が目の前である。山頂付近は「センプリ」が花盛りであつた。帰りに「清水山」の「三の丸」に登る。下る途中なら簡単に登れる。ここ四等三角点がある。

昼食にアナゴ天麩羅定食を食べたが、あまりの大きさと量に舌鼓を打つた。三八二号海岸沿いの「鬼ヶ島」という食堂である。

次に三八二号をひたすら北に向かい、「万間橋」を渡り一時間三〇分くらいで「御岳」登山口着。一五時を過ぎていたかどうか。さっそく登山開始。山頂手前の神社には水場がある。一時間くらいで山頂「御岳」着。

途中のシンボル「もみの木」、山頂近かの鳥居は台風で倒れていた。三角点はないし、展望もよくない。

次に「平岳」へ。尾根続きで四五分で行けるとあつたが、実際には風倒木が行く手をさえぎり一時間くらいはかかつた。一等三角点がある。暗くなつておいたのでテープをベタベタ付けておいた。「平岳」往復を終え、「御岳」登山口に着いたときは急いだせいであろう、一八時三〇分頃でまだ懐中電灯を使うほどではなかつた。この一帯は「対馬ヤマネコ」の保護区になつている。

今夜は別のホテル「ホテル対馬」。ビジネスホテルで素泊まり五〇〇〇円。夜は「厳原」の街にくりだした。韓国料理の店。ママさんは韓国人だつた。

一三日、朝五時発、北に向けて出発。昨日の「御岳」登山口を過ぎ、「佐須奈」に着いたころガソリンが無くなつた。夜が明け始めた六時二〇分くらいだつた。せつかく朝早く出たのに、ガソリンスタンドが開くのが七時三〇分。ここで一時間近く無駄な時間を費やしてしまつた。さらに北に三〇分「韓国展望所」到着。「韓国」が手に取るように見える。ここからわずか四九.五kmの所である。少し戻つて三角点のある「韓国展望山」に登ろうと思つたが、今は自衛隊国境警備隊の

「韓国展望山」に着いたときは急いだせいであろう、一八時三〇分頃でまだ懐中電灯を使うほどではなかつた。この一帯は「対馬ヤマネコ」の保護区になつている。

今夜は別のホテル「ホテル対馬」。ビジネスホテルで素泊まり五〇〇〇円。夜は「厳原」の街にくりだした。韓国料理の店。ママさんは韓国人だつた。

一三日、朝五時発、北に向けて出発。昨日の「御岳」登山口を過ぎ、「佐須奈」に着いたころガソリンが無くなつた。夜が明け始めた六時二〇分くらいだつた。せつかく朝早く出たのに、ガソリンスタンドが開くのが七時三〇分。ここで一時間近く無駄な時間を費やしてしまつた。さらに北に三〇分「韓国展望所」到着。「韓国」が手に取るように見える。ここからわずか四九.五kmの所である。少し戻つて三角点のある「韓国展望山」に登ろうと思つたが、今は自衛隊国境警備隊の

「韓国展望山」に着いたときは急いだせいであろう、一八時三〇分頃でまだ懐中電灯を使うほどではなかつた。この一帯は「対馬ヤマネコ」の保護区になつている。

建物が占拠し、立ち入り禁止となつてゐる。許可を取れば登れそうだが時間がない。すぐそばの「高麗山(こうらい)」に登つた。三〇分登山頂着。ここも自衛隊のレーザー反射板が占拠してゐた。三角点は無い。ここから昨日登つた「御岳」がよく見える。「韓国展望山」も眼下に見える。早々に下山し「対馬ヤマネコ」を見るため「野生生物保護センター」へ行つた。しかし残念なことに休館日であつた。時間がない。大急ぎで「厳原」まで戻る。途中のこじんまりとしたレストランで「アワビ井」を食べた。旨かつた。「厳原港」でレンタカーを返し、土産を買つて一三時一〇分発ジェットホイール「ヴィーナス号」で博多港へ。約二時間である。二〇時ごろやつと我が家に帰り着いた。楽しかつた三泊四日の登山であつた。本年度ここまで九二山。

(この原稿は昨年一二月に、児玉さんから寄せられていたものです)



グリーンデルワル トトレツキング

八重康夫

(その2)

九月一九日

朝三時に目が覚めて、今、日本は午前一〇時だから、迷惑にはならない時間帯と思ひ、日本の家族や友人に国際メールをだした。皆、文明の利器にびつくりしてゐた。日本で国際仕様のボーダホンを用意してゐたが、これが、一人ではじめて外国を旅するのに大変心強かつた。メールと一般電話へは電話も出来た。携帯への電話の仕方は、どうもうまく使用出来なかつた。

今日は、午前中は仕事のみ時間を振り当ててゐた。無事仕事が終わる、一二時ごろ、ファーストフード店で軽い食事を済ませた。さあ今から仕事関係の荷物やいらぬものをトランクに詰めて、これを送り返そうとホテルに相談すると、出来ないと言ひ。それなら宅急便はと聞くと、パリでは宅急便は日本のように発達してゐず、数少ない大和の宅急便も今日は日曜だから休みだ。

パリ市内には荷物を送つてくれる所はどこにも無いと言われた。困つてJTBに連絡すると、ドゴール空港のJTB事務所の

隣に、荷物配送会社があるというのでそこに電話すると、受けてくれると言われたので、タクシーで空港まで荷物を持っていった。

ところが、そこにはやる気の無い若い女性の事務員がいた。仕事の最中にも若い同僚の男性と自分の目の前でいちやいちゃやしている。早くやつてくれよと言ひたがつたが、すべて英語のやり取りで、時間がかかる。我慢して交渉していると、すつたもんだの挙句、荷物は自分の乗る飛行機にしか乗せられないことがわかつた。

お金が150ユーロ(日本円で約22000円)もかかるのである。したがつて自分がパリから帰る飛行機にしか乗せられず、荷物も成田で受け取らねばならないらしい。普通ならただのところである。申込書まで書いて、お金を払つてゐたが、バカらしくなつて、「イツツ、キャンセル」と言つて、お金を返してもらい、また荷物をもつてホテルに戻つた。

空港にコインロッカーがあればと、JTBの人に聞いてみたが、空港にはロッカーが一つも置いて無いと言ひ。怪しげな荷物は全部爆破されるということだつた。これでパリを観光する貴重な時間を三時間も無駄にしてしまつた。しかも往復のタクシー代、約30ユーロが無駄になつた。しかし良い勉強になつた。

予定としては、帰りにまたこのパリ、リヨン駅に戻ることになつてゐるので、宿泊ホテルに二、三日預かつてくれなにか聞いてみようと思つた。

だめ元である。ホテルで聞いてみると、気持ちよくOKしてくれだ。最初からこうしておけば無駄なお金と時間を浪費しないで済んだものと思つたが、ザツクだけであとは気軽に動こうと思つてゐたのが間違ひの始まりだつたのだ。

いずれにしても良かった。時計は既に、午後三時を回つてゐた。パリを見る時間は今日しかない。よしこれからでも市内の観光をしようと思ひ立ち、まずタクシード旋門に向かつた。少し手前で降りてジャンゼリゼ通を歩いているうち、観光バス無料券をJTBの人からもらつてゐたことを思い出した。これは良かった。このバスがあれば、各名所毎、どこで降りても良いし、バスは一〇分毎に次々来るから無駄が無い。

こうして、凱旋門、エッフェル塔、ルーブル美術館、ノートルダム寺院、オペラ座と見て回つた。外見だけではあるが、最後にタクシードモンマルトルの丘に行つた。この時のタクシードが最悪だつた。JTBのメーターに對し、メーターも要求されたのである。

時間も無く、暗くなつてきていたので払つたが、この次はこ

んなことはさせないぞと思つた。丘にはたくさんの方が居て、パリ市内が広く見渡せた。さて、ここではタクシードが拾えそうに無い。うるうるしてゐると、ケールカーの駅があつてここから下に降りれるらしい。切符を買おうとそこに並んでゐると、地面に何やら見なれた切符が落ちてゐる。

どうも先に、JTBの係員にもらつた一〇枚綴りの券のようだ、これを一枚とり窓口で見せるとOK、機械に差込めと言ひやつて見ると、回転レバーが上がり、乗車できた。ただで丘の下まで降りれてラツキードと思つた。

少し歩くとタクシードの通つてゐる広い道に出たので、手を上げて拾ひ、ホテルへ帰つた。ガール・ドリヨンと行く先を言つと、発音が悪かつたのだから、南フランスのリヨンと思つたらしい。とんでもない奴を拾つたと思つたのだらう。しかしホテルだと言ひおすと、わかつてくれて、目的の宿泊ホテルに着いた。

この運転手は愛想が悪かつたが良心的だつた。いくらだと聞くと、メーターの値段で良いと言ひ。こう言う人にこそチップを上げるべきだと思つた。旅なれた人に聞くと、値段を聞くのではなく、メーターの料金をまづ払つて、別にこれがチップだよというのが良いとか。以後注

意しよう。

夜は、駅の近くのファーストフード店で添加物の少なそうなものを軽く食べた。さあ、いよいよ明日の準備だ。切符の準備をして、グリンデルワルトの解説書を読んで一時間には床についた。



私の無名山ガイドブック27

飯田勝之

七年山

大分宮崎県境にまたがる桑原山（八本木）は、九州では最も自然度の高い山だと私は思う。それはこの山が、登るには不便で、展望もほとんどなく、一般登山者にとってはほとんど魅力が感じられず、そのため長い間寄りつかれなかったことが大きな要因と考えられる。

山頂に古いほころのあるこの山には、昔から一般登山道らしきものはなく、昭和四〇年代後半に、宮崎県側の矢立峠の手前まで林道が開通して以来、この

峠からの道がノーマルルートとして利用され始めたに過ぎない。「大分百山」で紹介されている万次越ルートや、県境尾根ルートは昔からあったが、ブッシュと不確定な踏み後のため、山なれた人以外はなかなか歩けなかったところである。（最近県境尾根ルートは仙人の岩経由で、かなり歩きやすい道となっている）

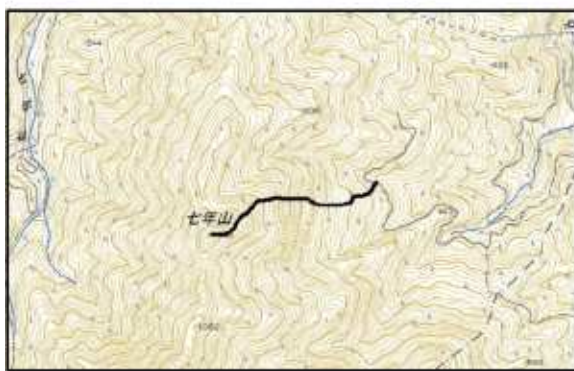
桑原山から北の桑原川の溪谷に向かって大きく張り出した尾根がある。一四〇八mの山頂から高度を下げ、一旦九八〇mまで下がった尾根が再び高度を上げて、一〇三二mのピークをなして、再びゆっくりと溪谷へと落ち込んでいく。このピークが七年山である。

桑原山には昭和四一年に初めて登って以来、何度も登っているが、いつの頃からか七年山は私にとっては、なぜか気になる存在となっていた。それは、ちよつと目には容易に近づかせてくれそうにない風情と、どこことなく神秘的なたたずまいがあったからである。

一度は登ってみたい場所であった。そして私は、過去三回挑戦していずれも成功していないのである。

最初はもう一〇年以上も前、西側の七年谷から奥が迫林道を使って試みた。このときは桑原山方向にルートをとり過ぎ、猛烈なスズタケのブッシュとの格

闘で時間切れとなり撤退している。二度目はその数年後、今度は東側の桑の原林道から試みたが、とりつき地点を見誤って、いつの間にか桑原山の県境尾根に迷い込み、そのまま桑原山へ登って行ったのである。三度目は昨年の春、同じ桑の原林道からとりついていたが、雨と深い霧で林道からのとりつき地点が判明できず、見当をつけてヤブにこぎ入ったが、雨のヤブこぎがおつぐうになり、早々にあきらめ



て退散している。

このたび、ヤブこぎシーズン？の終わり間近な四月のある日、四度目の挑戦を試みた。今回は過去の反省をもとに入念に下調べしての挑戦だ。林道のと

三つのポイント地点を地図上にと落とし、インターネットで調べたそれらの経緯度を、GPSに記録しておいた。

国道三二六号線から藤河内溪谷に通じる町道に入り、さらに桑原発電所の上から桑の原林道に入る。はじめはアスファルト舗装のこの道は、すぐに荒れた砂利道となるので、その先はRV車でないと無理であろう。

林道入り口から二、三kmほど行くと大きな左カーブの地点にプレハブの林業作業小屋があり、付近は小広場となっている。この小屋の前がとりつき地点だ。林道側面の崖を登り、ヒノキの造林地を上に向かって登っていく。ここのヒノキは、まだ植樹後数年しかたっていない若木だが、十分に登ると十数年以上経たず成木も変わる。これらの植林地の中を、右に左に歩きやすい所を選んで登ると、五分ほどで緩い傾斜の尾根状の林内を進むようになる。

緩斜面少しを登って行くと、登り口から四〇分ほどで左手が開けて、大きな岩があらわれる。この岩の上に立つと、すぐ右手にどっかりと桑原山県境尾根が大きく高く横たわり、その左手前方には鷹鳥屋山や板戸山からさらに遠くの県南・県境の山々が見渡せる。

次第に急になる斜面を登っていくと、二〇分ほどで人工林が終わり、照葉樹を中心とした天

然林となり、ブッシュも浅く歩きやすくなる。さらに数分間急斜面を登ると、大きな赤松の目立つ、ほぼ平らな稜線の上に出て、しばし心地よい樹間のプロムナードである。

しかし、再び急傾斜の登りとなり、やがて前面に大きな岩壁が行く手を遮る。右に回り込むようにして岩を這い登ると、やや緩斜面で一息。しかし再び急斜面の直登、そして、また岩壁

これを今度は左に巻いて、岩の間の狭い谷状の急斜面を、木の枝や幹に縋りながら、這うようにして登っていく。するとまた巨岩があらわれてこれを巻いていく。こうした繰り返しで、樹林は次第に落葉樹が多くなり、さらに登るとブナやトガヤヒメシャヤなどの高木となる。深い樹林の中で視界も効かないので、ただひたすら上に向かって行く。

樹林に阻まれてGPSの「衛星信号ロスト」の警報もたびたびである。磁石で方向を確かめながら、登りやすい所を選びつつ登り、衛星電波をとらえたGPSが示すポイント位置との照合をしつつ、ルートを確かめる。ルートファイディングの醍醐味がある。

大きな岩壁の間を直登して、木立の深い急斜面を登っていくと平らな稜線に出た。山頂直下の、頂上から北東に張り出した尾根の出っ張りである。ここまで登り口から三時間あまり。木

々の枝ごしに頂上部分が見える。少し下り気味に稜線を進むとやがて最後の登りとなって、四〇分ほどの急登で、北東に長く延びた頂上の一角にたどり着く。さらに、巨木が根を張った岩稜の小さなアップダウンを楽しみながら進むと、一〇分ほどで高いピークに着いた。

(七年山山頂の乾杯)



大きな山頂の一角で、周りより一mほど高く、二坪足らずのこの岩の集まりに樹木が生えたこの小ピークが憧れて久しい七年山の山頂である。なんと貧弱な山頂であるう事か。登り始めて約四時間。ここには三角点はおるか、山頂を示す何物もない。しかし静かな樹林の中である。芽吹いたばかりのブナの新芽の間から吹いてくる風が心地よい。ウグイスの声に混じって、登る

途中絶えず聞こえていた鹿の鳴き声が遠くで聞こえている。千古斧を知らぬこの、手つかずの自然さがなによりである。

伍ビールのプルを引いて、冷たいのどごしを味わいつつ、一人しみじみ、そこはかたない達成感と満足感にひたる。

木々の梢越しに間近に、まだ冬色の残る桑原山頂が見える。ブナの急斜面を北西方向に五〇mほど下ると巨岩の絶壁の上に立つことができる。そこからは、眼下に見える七年谷と藤河内の集落、谷をへだてて前方に、木山内岳から夏木山、鯉、檜山、新百姓山、天神原山、さらにその背後には本谷山や傾山などの大展望が楽しめる。

下りにも三時間ほどを要したが、登りに絶えず木の枝を折るなどして目印を忘れなかった。でないと、こんな原生林で帰路を見失ったら、それこそ富士山の青木ヶ原なみの樹林の彷徨を強いられるであろう。それにしても、GPSはけっこう便利な機器だと痛感した。



樹間からみる桑原山

今西

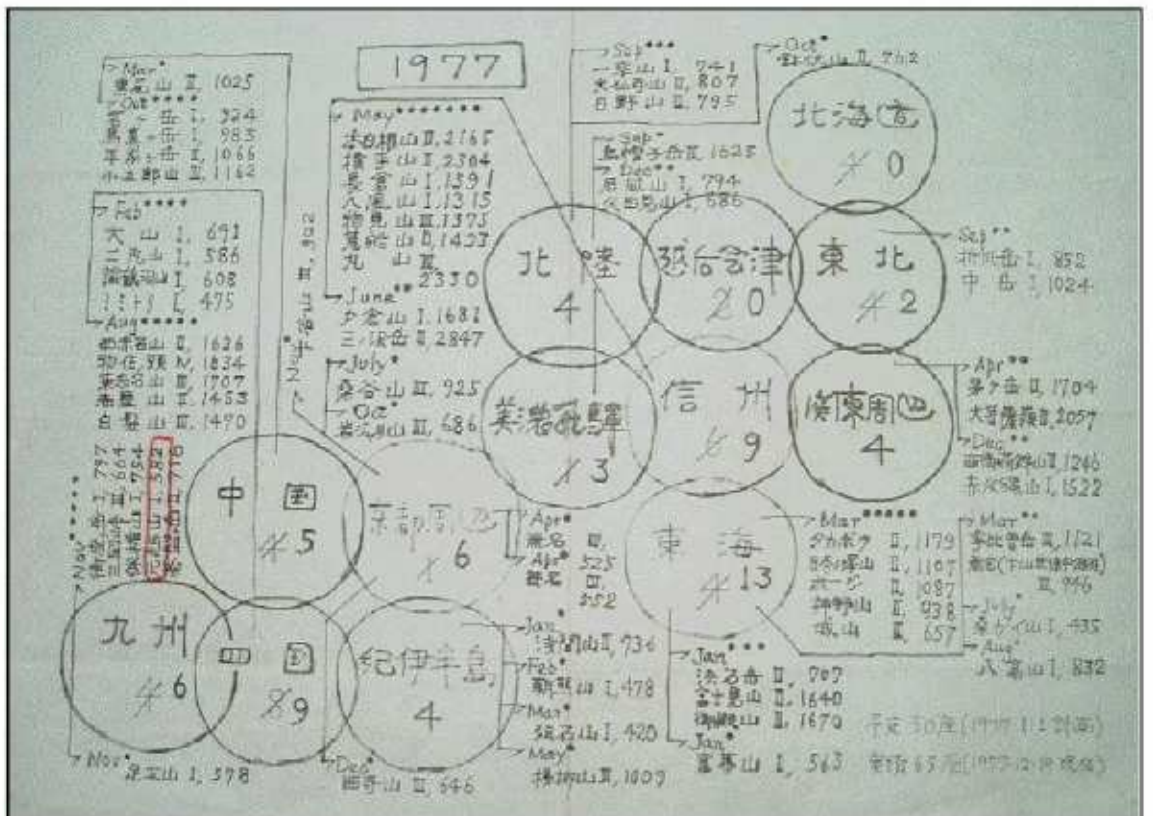
錦司

②

西 孝子

今年もみなさまがたのご支援により、六五座の山に登ることができました。厚く御礼申し上げます。来年もどうかよろしくお願い申しあげます。なお、喪中につき年賀状欠礼いたします。ご参考までに、本年の登頂一覧表を同封いたしますから、ご覧ください。一九七七年一月二〇日(なお、表中、赤線で囲ってあるのがご一しよした山です)

いただいた文です。毎年十一月より、葉書で喪中の連絡をいただきます。先生の手紙ほど、楽しく読ませていただいた事はありません。これは奥様が亡くなられた年です。別紙の表はいつ見ても先生の姿を思い出し、二時間はすぐに過ぎる中味のこいものです。日本列島を分ける今西流、



予定と実績。月の横の... (点)は山の数、山名、一、二、三、四等三角点の別、高度。見ていただいた方が先生の心きが伝わりとおもいました。二、十八年前、私にまで送っていただいたこの表は宝です。日本地

図と見くらべて、ご覧ください。
(黒いベレー帽、細い杖で歩く姿を思いながら)



お知らせ

六月月例山行のご案内

- ・月日 六月一九日(日)
- ・目的地 大崩山(宮崎県)
- ・出発 六月一八日(土) 午後五時サニー発
- ※テント、シュラフ、三食分の食糧持参のこと。
- ※一九日午前六時大崩山登山口集合も可

七月月例山行のご案内

- ・月日 七月十日(日)
- ・目的地 新百姓山(県南地区・宇目町)
- ナツツバキの山旅(サブテーマ:百周年)

- ・出発 サニー午前五時発
- ※ 現地集合の方は、木浦小学校前午後七時とします

八月月例山行のご案内

- ・月日 八月二十四日(土)
- ・目的地 百々山(宮崎県)
- ・出発 二十四日午前五時サニー出発
- ※ 翌日二五日(日)は広島県の最高峰恐羅漢山(一三四六m)に登る予定です。

事務局よりお願い

- 一、往復乗書(総会出欠)で住所変更の方はお知らせ下さい
- 二、支部会費:納入下さい。(会友で三年以上未納の方は自然退会といたします)
- 三、知人で山登りが好きな方を会員・会友にお誘い下さい。なお、新規加入会員は四〇歳以下を原則としています。(会友は年齢・キャリアを問いません)
- 四、写真(支部月例山行)、

を持っていきます。大分へお出かけの折りお寄り下さい。
五、支部事務局へ電話の場合は、一五回信号お願いします。またはFAX願います。
FAX 097-532-0926
六、月例山行の参加は三日前までにご連絡下さい。

「青少年体験登山大会」「百周年記念登山大会」「中央分水嶺踏査完了記念登山大会」

三つの催しを併せた登山大会を七月二四日(日)久住山で実施の予定です。詳しいことは役員会で決めて、後日皆様にお知らせします。

平山会長を囲んで

今年も平山会長が東九州支部に來られる予定です。その折には、時間に余裕があれば昼は講演会、夜は会長を囲んで懇親会を予定しています。詳しいことは後日正式に決まり次第お知らせします。

○予定月日:七月二三日(土)

役員会のお知らせ

- ・日時:五月二五日(水) 一八時三〇分より 二一時まで
- ・場所:大分市「コンパルホール」四〇四号室

後記

- 今年はいつもの以上に山桜が目立ったように感じました。花付きの良い春の到来の予感でした。
- 四月中旬の平治岳のミヤマキリシマは、今にも開きそうなたつばみがいっぱいでした。このままでしたら今年、一面のピンク色が見られるかもしれません。
- 大崩山の宇土内谷コースの稜線に群生するアケボノツツジは、例年になく賑やかさ、豪華さでした。
- 我が家の庭のシャクナゲは、三年ぶりに枝いっぱいの花盛りとなりました。山も今年三年ぶりの咲き具合が期待できそうです。
- 私事ですが、四月から仕事場が変わり、不慣れな仕事に追われて、少しゆとりを失っ

ているところです。
○ でもやっぱり週末になるとついつい外に・・・山・・・に出かけてしまいます。
○ フラビ、ゼンマイ、ヤブレガサ、ウド、タラノメ、ハリギリ、コシアブラ、ハナイカダ、マユミ・・・山菜シーズン到来です。
○ 皆様の楽しい、おもしろい山遊びの原稿を送って下さい。お待ちしております。
(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第29号
2005年(平成17年)4月25日(水)
発行者 梅木秀徳
編集者 飯田勝之
発行所 〒870-0021 大分市府内町1-3-16
サニースポーツ内 西孝子方
TEL・FAX 097-532-0926
題字 佐藤正八